

## 2023年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏名
教育学部 子ども発達学科	准教授	梶浦 恭子
最終学歴	学位	専門分野
岐阜大学大学院 教育学研究科 教科教育専攻・家政教育専修（修士課程）修了	教育学 修士	幼児教育学

### I 教育活動

#### ○理念・目標・方針・計画（方法）

##### 【理念】

建学の精神「真に信頼して事を任せうる人格の育成」を尊重し、幼児教育のものの見方や考え方の基礎を身に付けていく。さらに、教師観（幼児の行動理解者、遊びの共同作業者、子どもの特性や発達課題の援助者としての役割）や、幼児を取り巻く人や自然などの環境観を持ち、未来を創る持続可能な社会のために尽くす人材の育成に力を注ぐ。

##### 【目標】

保育・教育内容には豊かさと感動がある。幼児の遊び（生活）には楽しさと発見や学びがある。子どもの育つ過程には、子どもの特性と発達の課題を持ち合わせた生活が営まれている。

学生には目の前の一人一人の幼児らしい多様さに応じる感覚を持ち、環境（物的、人的、自然的、社会的）を構成する行動（指導援助）ができる専門知識を授け、実践後には自己省察ができる。そのために、気づき、判断し表現できる真面目さ、また持続可能な社会を創るための教育課題を持ち行動する誠実さがある。地域社会の発展に貢献し得る有為な人材育成を目指す。特に、感覚を磨き、きめ細かな対応ができる育成を目的とする。

- ① 学校教育法に基づき国が定める教育課程の基準である幼稚園教育要領を基盤として、自問自答を行い、多様な価値を受容しながら自ら考え判断し行動する、信頼感ある主体的態度を身に付けることを教育の旨とする。
- ② 持続可能な社会の人材として、社会の教育課題に進んで貢献し対応する態度を身に付けることを教育の旨とする。
- ③ 健やかな身体と豊かな心を持ち、他者のことを考え、多様な人々と適切な関係性を取る未来社会を切り拓く態度を身に付けることを教育の旨とする。

##### 【方針】

- ① 自己の教師観（幼児の行動・内面の理解者、遊びの共同作業者、子どもの特性や発達課題の援助者、未来を創る環境教育者等の役割）を持つ事を任せうる人格の育成をする。
- ② 保育・教育者になる初心を忘れず五感を働かせ、好奇心と向上心と責任感を持ち、常に省察し学び続ける人材を育成する。
- ③ 他者の考えを尊重し交流ができ、自他共に平等で安全なよりよい生活を創り出すことができ、社会が持続するための幸せを求める人材を育成する。
- ④ 四季のある日本の自然を愛し、幼児期から環境教育（人間の自然性や他の生物との共通性、多様性の美しさ、生き物の生息環境を守る）意識をもち環境問題課題に動き出せる人材を育成する。

##### 【計画（方法）】

- ① 授業では、ガイドラインである学習指導要領、幼稚園教育要領を基本に、専門知識を習得する。
- ② 実習現場で行う部分（全日）保育活動指導について、遊びにおける環境構成や内容の構想ができ、

保育指導計画づくりの基礎知識（「子どもの実態」「予想される幼児の活動」や「教師の援助、留意点」内容）を習得する。

- ③ 教育教材（映像や資料）研究と指導援助方法の分析、事例（発達の特徴をふまえた各場面）の分析を行い意見交流（グループワーク等）し、保育内容や指導援助方法の多様なあり方を創造することによって保育指導案の試作につなげる。視聴覚カメラで指導案を学生に公開し、模擬保育の実践演習（導入～まとめ～自己課題の記録まで）を行う計画をする。
- ④ 幼児期の教育と幼児期における環境教育を推進するために、自然との関りをとらえ直す。学外に出る前に、心得を共有し、自然遊びに親しむ（自然遊びを見つける、創る、交流する）。
- ⑤ ④の段階で終えず、幼稚園教育要領の、幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿にある「自然との関り・生命尊重」は保育計画で意識化し大切にできたかを追究し、自然との関りをとらえ直す。

#### 【担当科目】

（前期）生活、総合演習Ⅰ、幼児と環境

（後期）教職実践演習（幼・小）、生活科教育法、総合演習Ⅱ、保育内容（環境）、幼稚園実習理解

#### ○教育方法の実践

- ・「保育内容（環境）」領域の指導計画案構想を、学生には、自分事の意識を持ち立案するように課した。事前に、教育教材（映像や資料）の事例を通して、どう幼児の行動を理解し、保育者の立場をイメージして援助をするかを、構想する課題とした。目の前で起こると想定するように伝え、行動や理由を具体的に記述した後、意見発表し交流した。教育教材を準備する意識は必要であること、模擬保育演習後には、ふり返り、助言をまとめて自己の課題設定をすることを重要な評価観点にした。学び続ける教育者としての流れが体得できるからであった。
- ・「幼稚園実習理解」では、DVD映像（3歳児～5歳児の発達する）視聴を行い、実習生の観察実習と仮定して考えさせた。幼児の行動観察は、幼児の姿や教師の心の内面を探る等の事ができた。4年生先輩や第三幼稚園箆橋園長先生をゲストに迎え、「実習生の心構え」を受講する授業は、幼稚園実習の意欲になる機会となった。
- ・「教職実践演習」ではテーマに沿った内容を班ごとに発表をする。その際、設定理由、引用の記述方法やまとめ方の注意について、スライド資料で認識させた。ネット情報は参考に留めること、確かな情報の記載等を説明した。3人の教員体制で行ったことは有意義だった。
  - ・「生活科教育法」でも3人体制だった。生活科が、現在のような告示の形で定められたのは、いつか、とクイズ形式の間や、「幼稚園教育要領、小・中学校 学習指導要領等の改訂の基本方針ポイント（抜粋）」平成29年2/14資料をスライドにまとめて示した。後期は、理論を踏まえ、模擬授業を展開した。評価は2人の教員（小学校教師視点と幼稚園教師視点）による授業の共演、共同体制は、見方、考え方を伝えあった。この授業体制は学生ばかりか教員の学びにもなった。

#### ○作成した教科書・教材

- ・「幼児と環境」「保育内容（環境）」では、
  - ▶各回の教材スライド資料 と振り返りのためのワーキングペーパー
  - ▶木の葉や枝、蔓を利用した自然遊びの造形作品（テントウムシ、トンボ、リース、円や星型の形）
- ・幼稚園実習書類「実習にあたって」の書き方（プリント資料）
- ・指導案作成時の参考プリント資料
- ・「生活」では、

- ・5回の教材スライド資料 学習指導要領と生活科，生活科で子どもの学び等の資料
- ・教職実践演習では、課題発表方法とまとめ方資料

#### ○自己評価

- ・領域（環境）では、スライド資料を準備した結果、配慮する学生が意欲的な姿を表現し、他学生への刺激となった。
- ・振り返り（ワーキングペーパー）は、学生の捉え方の良さ、考え方の工夫が表現でき、学生の成果の見える化につながった。
- ・指導案作成の添削と模擬保育設定の資料は、指導案作成時の3観点を示した。
  - ・「ねらい」に教師の願いと幼児の発達課題を含ませる
  - ・「まとめ」は「ねらい」の内容を踏まえたしめくりをする
  - ・「環境の構成」には事前準備が大切である

以上を基に、個別に添削した。模擬保育時には、4年生学生 SA には学生支援の助言者として、学生グループ 10 組とし、3 役（教師、幼児、観察者）分担制で保育演習を実施した。SA の援助タイミングや評価発言が良く、SA 協力の元、全員が保育実践でき授業展開は達成できた。環境構成面の準備は、自然物を平和公園で収集するものの、例えば、どんぐりが乾燥したために「こま」作成に及ばなかったり、まつぼっくりの実の準備ができなかったり、後片づけまで最後の配慮不足の点が課題となった。

## II 研究活動

#### ○研究課題

1. 幼児期の環境教育をめざした自然あそびに関する保育教材の開発
2. 「かがくえほん」の効果的な利用のあり方  
— 学生による読み聞かせを通して —

#### ○目標・計画（

##### 【目標】

1. 自然界にある身近な環境からの刺激を先生や仲間と一緒に受け止め、幼児が対象物に触れ、親しみ遊べて幼児期にふさわしい生活や経験を生む保育教材の開発を学生と共に追究する。
2. 絵本の中でも「かがくえほん」の良さに学生自身に気づかせる。幼児期にふさわしい環境である意識を学生自身が理解し、聞き手に読み聞かせを行うことを目的とする。

##### 【計画】

1. 本研究の実施計画は、  
2023 年 4～7 月、総合演習、幼児・初等教育コースの科目「幼児と環境」や、初等教育コースの科目「生活」、において、学生とともに名東区の平和公園のフィールドワークを行う。  
ワーク後、幼児期の環境教育のための教材教具開発を目的とする。学生の共同で開発したプログラムは、2023 年 9～12 月に、協力園との連携ができる保育園または幼稚園や大学祭において、実践を通じ、その効果を検証する。得られた知見は、日本環境教育学会第 34 回年次大会において（8 月の途中過程の内容）だが、発表し、広く参加者からの意見を求める。
2. 本研究の実施計画は  
2023 年 4 月 ・「かがくえほん」読み聞かせの利用について、いつ、どこで行うか  
※名古屋市平和公園のフィールドワーク  
・具体的な演習方法を話し合う。・表現の在り方の演習を仲間と行う。  
2023 年 5～7 月 ・名古屋市平和公園のフィールドワーク

- ・ 幼児期の環境教育の教材・教具の開発・追究をする
- ・ 園外の公園で実施と振り返り・評価する
- 2023年8月 ・ゼミ内研究内容の調査結果の検討（愛知東邦大学内）
- ・ 日本環境教育学会第34回年次大会（鳥取大学）学会にて報告
- 2023年9～12月 ・連携する保育園、幼稚園における実践を通じ、環境教育の教材開発の効果検証
- ・ 連携をもとに保育園、幼稚園の実践を通じ、「かがくえほん」の効果の検証を行う
- 2023年11月 ・大学祭において ※実践・効果の検証を行う ・協力園での読み聞かせ実践
- 2023年12月 ・ゼミ内研究内容の実践・調査結果の検討（愛知東邦大学内）
- 2024年1～3月 ・研究報告書をまとめる

○2016年4月から2024年3月の研究実績（特許等含む）

（著書）

- ・ 江田司 梶浦恭子 田中まさ子 谷口篤 横井志保 他8人『教育実習の手引き(幼稚園・小学校)』一粒書房、2016年、第1章第3節 幼児教育に携わる者に求められる専門性 第2章第3節 指導案の立て方・指導案 35-36、43-46

（学術論文）

- ・ 梶浦恭子「0～3歳児の自然体験遊びについて」名古屋学院大学論集. 社会科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 54(4), 171-181, 2018 <http://doi.org/10.15012/00001066>
- ・ 梶浦恭子, 西澤彩木「自然物を手にする幼児はどのような表現をするのか：幼児の行動記録を手がかりに」名古屋学院大学論集. 人文・自然科学篇 = Journal of Nagoya Gakuin University 53(2), 125-138, 2017-01 <http://doi.org/10.15012/00000877>

（学会発表）

- ・ 梶浦恭子 Why do children pick up branches during Forest Kindergarten, and why do they play with them? : From behavioral records of children (3-6 years old) in the forest 2024 Japan 10th International Outdoor Education Research Conference 2024-3/4～3/8
- ・ 梶浦恭子「保育者、教員養成におけるかがく絵本を教材にした自然とのかかわり」一般社団法人日本環境教育学 2023-8
- ・ 梶浦恭子 「森の動植物に出会う幼児は自然体験活動から何を磨くのか（2）-特性を持つ5歳児の手の平や手指の動きを観ることから考察する」  
How infants who encounter flora and fauna are refined from experience in nature (2)-A study of characteristics 5-year-old children hold while using palms and finger to observe -日本野外教育学会 第24回大会 研究発表抄録集 2021-11
- ・ 梶浦恭子 「森の動植物に出会う幼児は自然体験活動から何を磨くのか」一般社団法人日本環境教育学 2021-8
- ・ 梶浦恭子 「大型の動物に触れる幼児の身体行為と保育者の役割」一般社団法人日本環境教育学会, 2020-8
- ・ 梶浦恭子「自然環境に関わる乳幼児と保育者としての役割」一般社団法人日本環境教育学会, 2019-8
- ・ 梶浦恭子「自然環境と幼児」一般社団法人日本保育学会, 2019-5
- ・ 梶浦恭子「自然体験活動からの学び：対象（自然）物に向き合う場面において幼児と保育者が並列の位置で育むもの」一般社団法人日本環境教育学会, 2018-8
- ・ 梶浦恭子「自然物に出会う幼児の表現行為を探る」一般社団法人日本保育学会, 2018-05

- ・梶浦恭子「自然物にふれる乳幼児の表現行為を探る：0～3歳児の抱っこや手つなぎから」日本乳幼児教育学会，2017-11
- ・梶浦恭子「乳幼児が自然物とかかわる意味を探る：森の世界の出来事における手の行為場面から」一般社団法人日本環境教育学会，2017-9
- ・梶浦恭子「自然物は幼児にどのような表現行為を生み出すのか：森のおやこクラス「おさんぽさん」の素朴な見える動きから」一般社団法人日本保育学会，2017-5
- ・梶浦恭子「保育者から研究者へ - 現場出身者の課題を共有する」日本乳幼児教育学会，2016-11
- ・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手がつくり出す表現を探る」日本乳幼児教育学会，2016-11
- ・梶浦恭子「自然物を用いた幼児の造形活動における指導のあり方」日本環境教育学会，2016-8
- ・梶浦恭子 作品発表「かくれんぼ絵本」絵本学会，2016-5
- ・梶浦恭子「自然物に触れて遊ぶ幼児の手の動きに注目して」日本保育学会，2016-5
- ・梶浦恭子「自然物（枝など）に触れて遊ぶ幼児の行動からみえるもの」  
(特許) (その他) 特になし

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

○所属学会

一般社団法人日本環境教育学，日本野外教育学会，絵本学会，一般社団法人日本保育学会，日本乳幼児教育学会

○自己評価

2024年3月に10th International Outdoor Education Research Conferenceが日本の開催で、世界から180を超える研究の申し込みが来ているとの情報を2023年5月に得た。Abstract（抄録：英単語300words）と発表準備が難題だった。が、世界の野外教育の最新の動向に触れることができること、海外の研究者とのネットワークを構築できる絶好の機会だと考え取り組んだ。結果は、テーマに沿った幼児が枝を持って遊ぶ写真や説明記述、補足資料を手立てに研究対象の幼児らが保育教材（自然物である枝）を利用する幼児の行動分析を説明しながら他国研究者の意見が聞け、交流ができた。

自然環境を活かした活動を含めて野外体験は、人の成長や学び（主体性の育成、イメージーションが湧くなど）、いくつかの学習効果や人格形成に通じると再認識できた。継続した研究分野であったことを誇りに思えた。今後においても、野外における実践的な自然体験活動の効果を、幼児教育現場において広く伝えられるようにしたい。

「かがくえほん」の特徴は2つ、①知識絵本でも“物語性”を持つ、②“着眼点”を読み手に意図的に伝える工夫を持つものという瀧川光治（2006）の論を意識し、「かがくえほん」を利用した授業展開、学生同士による読み聞かせ後に指導案作成課題を課した。グループ内で読み聞かせ後、絵本内容の着眼点を伝える演習を行ったところ、絵本の読み聞かせ方法や援助方法の理解を深める手立てに気づけた。学生の指導案の援助方法を分析すると、不思議さ、面白さが生み出せ、探索や製作活動へと移行できることが理解できた。幼児の科学的な芽を育み、児童の生活科教科活動に匹敵する行動と捉えられる。かがく絵本活用は学生の自然観（環境観）の人材育成面で評価できる内容であった。

### Ⅲ 大学運営

○目標・計画

【目標】

- (1) 就職に関する事項
- (2) 就職に関する情報収集及び分析に関する事項

### (3) 国内外のインターンシップに関する事項

#### 【計画】

(1) キャリア支援において学生ファーストを実現するため、個別対応力の強化を図り、学生のライフサイクル全体を支援する体制の実現を目指す。

#### ○自己評価

キャリア支援センター運営委員会では、

- (1) 「学生のライフサイクル全体を支援する体制の実現」に向け、
- ・就職支援センターの役割、活用法、就職支援センターの位置という基本的な認識がいて考え、学期ごと各学年ガイダンスにおいて、資料に沿って説明した。学生がキャリアセンターへ必要に応じて学生自身の問題解決に向かうとよいこと、就職の相談窓口は常に開かれている情報確認を行った。
  - ・2年生のゼミ学生については、保育者希望の進路に向け、日常の変化や生活リズム、授業の出欠席等、ライフサイクル全体に変化はないか、意欲増進に注視した。2年生12月の保育実習がきっかけで、別の進路を考えた学生はいたが、2月実施の施設実習では明るく意欲的な姿勢が実習訪問中に観察ができて見守ることにした。ゼミ学生に限らず他学生にも今後、将来の進路に向けた支援体制を望む。

## IV 社会貢献

#### ○目標・計画

(目標) 幼児教育の専門を生かし、幼児に関わる個別多様な課題に対して積極的に取り組んでいく。

(計画) スペシャルニーズの判断基準に相当する幼児(特徴のある幼児)の、課題追究や援助方法等、幼児と保育者理解に立った教育的な役割を行う。

#### ○学会活動等

- ・日本環境教育学会 (2023 8月) 学会発表  
保育者、教員養成におけるかがく絵本を教材にした自然とのかかわり
- ・日本開催の国際野外教育学会発表 (2024 3/4~3/8)  
2024 Japan 10th International Outdoor Education Research Conference

#### ○地域連携・社会貢献等

- ・SDG s AICHI EXPO 2023 (愛知県国際展示場). 教育学部「総合演習」学生ブース出店  
2023.10/7 11:00-12:30

#### ○自己評価

- ・学会活動では、日本開催の国際野外教育学会発表において、枝を持つ幼児の行動研究を広く外国の研究者に説明ができた。枝を持つ学び効果3論説のポスター提示は、枝の活用を描いたユーモアな絵本(翻訳本)が知れたこと、枝の他に石を投げる研究情報が得ることができた。また、「かがく絵本」は幼児期に必要な科学の芽を開く教育的な意味を持つ環境物であることを、日本環境教育学会においてポスター発表ができた。
- ・地域連携・社会貢献では、大学の職員の協力を得て、また学部教員の連携の元、1年間の流れを計画通りに進められ、学生と共にSDGsの教育教具、教材開発に向けた実践ができた。協働・協同作業において、多くの学びを得た。

## V その他の特記事項(学外研究、受賞歴、国際学会交流、自己研鑽等)

- ・総合演習合同プロジェクト「平和公園を活用した教材・教具・学習プログラムの共同開発」を、10/7(土)SDG s AICHI EXPO 2023(愛知県国際展示場)において、教育学部「総合演習」授業の一環

として学生主体でブース出店を行った。ゼミごとに、夏から秋の平和公園の自然物に触れて遊ぶ企画を幼児対象に考えた。ゼミでは、木の葉や木の実を利用した造形の教材となる作品を考案しブース会場で展開した。その経験を各ゼミ代表3名が集まり、2年生全体を踏まえた共同分担活動をまとめ、2023年12/16に「愛知学長懇話会 第16回 SDGs リレーシンポジウム」で発表したところ、「最優秀賞」を受賞した。

## VI 総括

学生には、平和公園は身近な場所になった。自然環境を体感することを基に、総合演習や保育内容（環境）を通年行った。鳥や川の流れる音、空の青さと光の美しさ、樹木の枝葉、実、蔓、草花の茂みの色彩の多様さと広大さに触れ、身体全体で森林を感じて行動すると、平和公園へその後も行きたい要望を訴える学生の声が多く聞かれた。解放され自然や仲間と触れあえて心身を満たし、のびのびと表現できる環境なのだろう。近い場所であり、森林の自然を活用でき、教育効果は大きく、学生への教材教具づくりや森林環境研究に今後も活用できる可能性があるかと再確認できた。

幼児が園庭にいれば、砂、土、虫や草花に触れて遊ぶ。学生の男女を問わず、自然環境全般に関心を高く持ち、興味深く触れる幼児の動きに寄り添える指導・援助者であってほしい。苦手意識や自然の遊びから離れる幼児へ向け SDGs、自然環境（科学教育）対策を講じたく、「幼児期から環境教育」をテーマに掲げたのだ。教師を目指す学生に向けた教材開発を目指すために試作を繰り返し、作品づくりや自然遊びを計画し模擬保育演習内容にしたところ、紆余曲折はあったものの、指導計画案作成から、実演、ふり返り、自己課題発見の流れを全員が経験できた。具体例として、木の葉の形や色を幼児が選ぶようにして、5、6枚を貼る造形「木の葉のみのむし」作品を学生は資料検索を重ね試作し実践した。学生達においては地味な活動と思えただろう。が、SDGs の自然物活用の意義は大きい。「愛知学長懇話会 第16回 SDGs リレーシンポジウム」「最優秀賞」の受賞を機会に、幼児期（と児童期）に自然物に親しんで楽しめる遊びへといざなう教師として、自然遊びを今後も高められるよう、さらなる研磨をしていきたい。

研究活動とともに、教育者としての専門性のスキルを増やし、関わる幼児や保育・教育者の伸びる力を信じ、これから担う予定の幼児教育関連の研修指導や相談事業に関わりたい。

心を研ぎ澄まし「感覚を磨き」関わる全ての方々と手を繋ぎ、真に信頼して事を任せられるきめ細かな対応ができる人材育成を目指し、今後も励みたい。

以 上